

月中節を前に當て植、九月始に蒔取此、外種々の名は有といへども、何も皆種子がへりて、國々里々に私に名を付る、農の諺に云、帷子麥に裕稻といふ云心は、麥は帷子を著て蒔、稻は裕を著て植よといふ事なれば、早くしてよしとの心也、又云、五月のしろにうへんより、四月の荒に植るにはしかじといへり、しろとは打おこしたる田を、牛馬にてとろりかきたる事也、荒とは打おこしたるまゝをいふ、是上に同じはやくうへよと云心也、

〔耕稼春秋六〕石川郡稻名略○中

晚稻

そより 黒餅 赤餅 目黒 越後白 撰出し よぶし しらか眞手 三九郎 眞手 石割  
 岡倉 遅岡倉 遅藤四郎 よごれ 出來穂 高尾屋 犬のゑ餅 疇越餅 五々百共云  
 の笠 大眞手 忠繩 四ふしと云 ぬぎ黒 こきごろ 大しろ 遅彌六 御坊餅 新保御坊  
 餅 ござれ餅 づら彌六 鹿島白 能と白 大穂

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年八月甲午、勅曰、略○中 今年晚稻稍逢亢旱、宜免天下諸國田租之半、寺神之封不在此例、

〔躬恒集〕秋田かる所

み山田のおくての稻をかりほしてまもるかりほにいく夜へぬらし

〔曾根好忠集〕八月中

あしげなるおくての稻をまもるまに萩の盛は過やしぬらん

〔倭名類聚抄十七〕稻

唐韻云、稻音呂、後漢書、讀於路、賀於比、俗云比豆知、自生稻也、

〔箋注倭名類聚抄九稻穀〕後漢書獻帝紀注、引埤蒼云、稻自生也、按說文無稻字、古只作旅、後漢書光武

紀、嘉穀旅生注云、旅寄也、不因播種而生、故曰旅、今字書作稻、音呂、古字通、漢書天官書注、晉灼曰、禾